



# 虹のかけ橋

\* \* \* \* \* 第31号/平成23年1月

兵庫県立 但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

## ピア・サポート活動で自己有用感を

自己有用感：他者との関係で自分の存在を価値あるものとして受けとめられる感覚

但馬やまびこの郷では、昨年度から4泊5日の宿泊体験活動の中に、ピア・サポート活動を取り入れています。様々な友だちにかかわることで、人とふれあうことの楽しさや集団の一員として役割を果たすことの充実感を味わわせたいとの思いからです。

スタッフが、仲良くするモデル、お手伝いモデル、お助け・相談モデル、お手本モデルの4つを提示して、「友だちの役に立つ活動」をしてみよう呼びかけ、子どもたちは、自分ができそうなモデルを選びます。



仲良くするモデル



お手伝いモデル



お助け・相談モデル



お手本モデル



子どもたちは、初め少し戸込みしていますが、シーツのかけ方を教えたり、活動に入りにくい子を誘ったり、困っている子の話を聞いたりするなど、徐々にかかわることができるようになります。

スタッフは、そうした子どもの動きをきめ細かく観察し、相手が喜んでいることを伝えたり、声のかけ方や配慮の仕方を褒めたりするなど、子どもたちの成長をそっと応援するよう心がけています。

子どもたちは多くは、「ありがとう」というお礼の言葉を聞き、相手の喜び様子を見て、とても満足そうな顔

を見せてくれます。人の役に立てたという満足感を味わっているのです。

図1は、当所でピア・サポート活動に取り組んだ児童生徒に、自己有用感に関するアンケート調査を実施した結果です。「友だちの役に立って良かったですか」「また友だちの役に立ちたいと思いますか」という2つの設問について、約7割が「良かった」「またしようと思う」と回答しており、ピア・サポート活動によって自己有用感を獲得していることがわかります。

当所では、人間関係を豊かにするさまざまな手法を今後も積極的に取り入れていきたいと考えています。

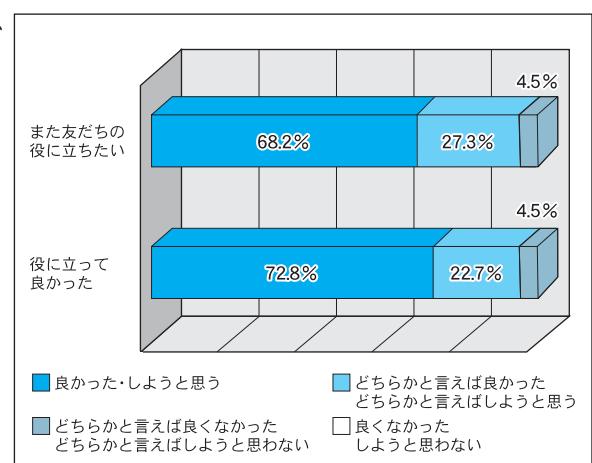


図1 自己有用感に関するアンケート調査



# 不登校を未然に防ぐ

## 開発的・予防的アプローチについて（その2）

関西学院大学 准教授 中村 豊

### 1 社会的スキルを学ぶ意義

児童生徒の不適切な行動の背景は、本人の性格や気質に要因があるのではなく、適切な行動を学んでいない、または、間違ったことを学んできたためと考えることができます。適切な行動とは、対人関係を円滑にするための知識とそれに裏打ちされた具体的な技であり、このことを社会的スキルとよんでいます。

近年の児童生徒には、社会的スキルを自然に身に付ける機会が減少している現状があります。ゆえに、学校の中で基本となる社会的スキルを学ぶ時間を設けることは、積極的生徒指導を推進していく先生方に、新たな子ども理解と支援への視座を与えてくれます。

社会的スキルを学ぶ意義は、次の2点です。

- ① 望ましい社会的スキルを身につけることで生徒指導上の問題行動を減少させる効果が期待できる。
- ② 意図的計画的に児童生徒の発達課題としての社会性を高めることができる。



### 2 どんな社会的スキルを身につけさせるか

社会的スキルの授業（社会的スキル教育 Social Skill Education、以下、SSE）では、児童生徒の発達課題や実態に配慮しながら、学級集団や個人に不都合が起きないための基本的スキルを身に付けさせる学習活動を展開します。

主な社会的スキルとしては、以下を挙げることができます。

他者理解、自己理解、感情表現（アサーション）、聴き方・話し方（姿勢、口調、視線、アクセント）、状況理解、コミュニケーション能力、人間関係作りの基本等

SSEは、①学習性が認められる、②観察可能な具体的行動を通して授業が展開される、③適切なスキルを使うと周囲から好ましい反応が返ってくることを体験的に学べるという特質があります。しかしながら、スポーツやお稽古事と同様に社会的スキルは積み重ねがないと身に付きません。また、基本となる社会的スキル（挨拶の仕方、仲間への入り方、頼み方、謝り方、断り方等）は、小学校段階における早い時期の学習が効果的です。

### 3 社会的スキルのカリキュラム

SSEを実践して一般化させるには、学年の発達段階に応じて学んだ社会的スキルを日常の生活の中で繰り返し使うことが求められます。そのためには、学校の教育課程に位置付けること、言い換えると全校体制で取り組んでいくことが必要です。また、教科・領域等でのカリキュラムと同じように、全体計画、学年別年間指導計画（表1）、毎時間の指導案や教材及び資料等を準備しておくことも大切です。このようにSSEでは、計画的・継続的に行っていくことが基本ですが、さらに、小中連携の視点をもつことも重要です。

実施時期	時数	題材・授業タイトル	身につけさせたいスキル等	ねらい
4月 9日～	①	コミュニケーションゲーム ～図形伝達～	伝え聞き取る双方向のコミュニケーション	図形伝達ゲームを通して、一方通行と双方通行のコミュニケーションの違いに気づき、伝え方や聞き方のポイントの理解を深める。
4月 16日～	②	いいとこさがし	他者理解、自己理解、自己洞察	他人のいい所を見つけ、自分のいい所に気がつき、自分の長所を発見することができるようになる。
4月 23日～	③	感じのよいあいさつ	礼儀、挨拶の仕方	相手、時、場所にあった挨拶の仕方を身につけ、よい挨拶、進んで挨拶ができる生徒を育てる。
4月 30日～	④	「はい！」の言い方	礼儀、挨拶の仕方	気持ちのよい返事はどうなめかをロールプレイを通して体験的に学ぶ。
5月 7日～	⑤	私はリポーター	適応力、インタビュー方法、発表力	大型連休中の過ごし方を取材することで、学級間でコミュニケーションの機会と場を提供し、よりよい聞き方ができるようになる。
5月 14日～	⑥	ものは言い方	コミュニケーション、相互理解	「ものは言い方」の意味を理解させ、望ましいコミュニケーションのとり方について体験的に学ぶ。

表1 中学校1年生における年度当初の授業(例)

#### 4 実践するにあたって

はじめに、授業を進めていく際の留意点を2点あげておきます。

- (1) 安心して練習できる雰囲気（児童生徒と先生の信頼関係）が構築されている
- (2) 教師の指示が通る（必要不可欠な前提条件となります）

1時間の授業展開は、次に示す流れで実施しています。



- ① 授業者が本時の目的とそのスキルの大切さや効果を伝える。
- ② 場面設定にふさわしいスキルを見せる。
- ③ ロールプレイングを繰り返し行うことで、場面を体験させる。
- ④ 児童生徒が実行したスキルの出来栄えについて評価をする。
- ⑤ 日常場面での活用の仕方を伝える。

定着させるには、「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやる」ことが大切です。発達障害が疑われる児童生徒については、専門家との連携を図りながら進めるようにしてください。具体的には、特別支援コーディネーターと相談しながら個別支援計画を参考にしていくことが大切になってきます。

#### 5 どのような効果が得られるか

SSEを実践した学校からは、多くの肯定的な授業評価を聞くことができました。

- ・ 学級モラールが高まり、学級内の人間関係がよくなつた。
- ・ 望ましい指示の仕方や口調・接し方を体験的に学び日常生活に生かせた。
- ・ 自己理解が深まつた生徒、自信をつけた生徒、他者理解を深めた生徒が多い。
- ・ 「聞く」「話す」ためのポイントが身に付いてきた。
- ・ 人を傷つける言葉が相手にどのように思われているか分かってきた。
- ・ 今まで知らなかつた相手のよさや意外な一面を知ることができた。

これらの成果が、結果的には生徒指導上の諸問題の軽減に寄与したものと考えられます。

#### 6 今後の方向性

これからの中学校教育では、教科指導と同様に生徒指導を充実させることができます大切になります。SSEは、そのための時間と場を教育課程内に保証していくものです。

しかし、SSEで学ぶことは、基本となる社会的スキルにとどまるという点を忘れてはいけないと思います。また、学校の実態や教育条件は異なっていますので、教育課程の編成に際しては、管理職や同僚の理解、教務主任や生徒指導主事等との連携についても大切にしていかなければなりません。

今後、開発的・予防的アプローチの充実のためには、年間指導計画や指導プログラムの検証を継続的に行っていくこと、授業者である教師の指導力・専門性の向上を図っていくこと等が求められます。

# 各種研修会を実施して



不登校児童生徒を支援する実践講座

但馬やまびこの郷では、「不登校担当教員研修会」をはじめ、「不登校に関する研修会」などの研修会を実施し、379名の先生方に受講いただきました。

初任者研修、10年経験者研修として行った「不登校児童生徒を支援する実践講座」では、児童生徒の活動支援を通して体験的に研修し、不登校対応についての理解を深めていただいている。

その報告書から、受講者の意見や感想を紹介します。

## 〈今後の教育活動に反映できることとして〉

- ・不登校の子どもたちへの対応はもちろん、未然に防ぐための取組が重要であることを学びました。早期発見、早期対応を心がけ、チームで対応していきたいと思います。(初任研)
- ・今は学校に適応しにくくても、やまびこの郷のようなかかわり方をすることで、子どもが積極的になったり、輝いたりすることができるということを学びました。(10年経験者)

## 〈研修全体をふり返って〉

- ・講義等が多い研修の中で、実際に子どもたちとかかわることのできる研修に参加できて感謝しています。スタッフの方の温かさに包まれているからこそ、不登校の子どもたちが活動に夢中で取り組むことができるのだと感じました。(初任研)
- ・教師として、また母親として、子どもにとっての居場所の大切さ、認めることや寄り添うことの大切さをあらためて感じました。(10年経験者)

# 地域の方々に見守られて

昨年度から実施している「ミニ・トライヤる」では、地域の16の事業所及び個人の方々に協力していただきながら、社会体験、就業体験、自然調査活動などを行っています。

今回は、アイガモ農法を営まれ、田植えや稻刈りでお世話になっている佐藤さんにインタビューさせていただきました。



- Q 不登校生に、何を感じてほしいと思われましたか？  
A 自分が植えたものが、大きくなっていく姿を見て、働くことの大切さや自分が生かされている存在であることなどを感じてほしかった。

- Q 子どもたちについて、どう思われましたか？  
A 1回目に作業が続かなかった子が、2回目には一所懸命作業している姿を見て、成長しているなと感じました。

- Q 受け入れてよかったと思われることはありますか？  
A 生徒さんの成長のお手伝いができたかなと思います。また、生命の大切さや生物の多様性についても伝わったのではないかと感じています。

- Q 子どもたちにメッセージをお願いします。  
A 多様な生物の姿を自分の目で見てほしい。そして、生き物を育むことで、自分たち自身が育まれているのだということを肌で実感してほしいです。

地域の方々との交流は、子どもたちに人とかかわる喜びを実感させるとともに、社会性を高めるための大きな力となっています。